

10

スピーチ・コンテスト

私は、国際交流協会の「外国人日本語スピーチ・コンテスト」の審査員を始めて、今回が三回目であるが、毎回出場者の日本語力が向上しているという印象を受ける。国内・国外の日本語教育の水準が上がってきている証拠として、大学の留学生教育の関係者としてはまことに喜ばしいことであると思う。

さて、今回も世界各国からの十五名の出場者がすばらしいスピーチを聞かせてくれた。なかでも人間を人種としてではなく個人として見てほしいと訴えた、アメリカの黒人女性アントワネット・ジョーンズさんのスピーチは、静かな語り方なためかえって説得力があり、感動的であった。彼女の第一位入賞が審査員の全員一致で決定したのも当然と言えよう。第二位と第三位

をだれにするかは、審査員の間で若干議論があつたが、留学生の苦しい生活を描写した中国の王強さんが二位、ヒッチハイクの旅行で日本を身近に感じることができたと語ったアメリカ人マーティン・ホルマンさんが三位ということで落ち着いた。実は、私には王さんのスピーチが強く印象に残っており、個人的には一位のジョーンズさんのものより考えさせられるところが多かつた。つぎに、王さんのスピーチの一部を紹介する。

5

われわれ中国人から見ると、日本人はみんなたいへんなお金持ちにみえます。だれか金持ちが私に援助の手を差し伸べてくれないかと思つていたちようどそのときに「トントン」とドアをノックする音が聞こえたのです。ドアを開けてみると、三十ぐらいの私のように髪の毛の薄い人が立っていて、「すみません『朝日新聞』です」と声をかけてきました。「朝日新聞」！これはきっと私のことをインタビューしに來たのだ。もし私の記事が新聞にのつたら、きっと金持ちの日本人の同情を引くはずだ。やつたぞ、と私は思わずほくそえみました。「どうぞ、どうぞ」と私は彼の腕をつかんでむりやり部屋に引っ張りこみました。でも、よく見るとこの人はカメラを持っています。まあ、写真はとつてくれなくても記事だけでもいいやと

10

思いました。

もちろん、日本のみなさんはご存じのとおり、この人は記者ではなく新聞の勧誘員なのです。しかし、当時の私は、それを理解するために何度も説明してもらわなければならなかったのです。なぜかという、中国にはこのような仕事はないからです。私は、新聞をとるより今の生活にさえ困っていることを説明したところ、その人は私に同情してくれて、「それでは新聞の勧誘をやってはどうか」とすすめてくれたのです。「一軒取れば三七〇〇円になりますよ」と聞いたときは、ワア世の中にこんなうまい話があったのかと思いました。一軒取れば三七〇〇円、十軒で三七〇〇〇円、百軒で三七万円！これで私の留学費用はもう大丈夫。それどころかハワイ旅行も夢ではなくなったのです。そう思うと私はすっかり有頂天になっ
てしまいました。

10

話の結末は読者の想像に任せるが、私がこの話に強くひかれたのは、この話が自分の青春時代を思い出させるからである。私も、かつて地方から出てきたときは貧乏学生で、まわりがみんな金持ちに見え、もうかりそうなアルバイトを探してやってみるのだがうまくいかず、という生活をしていましたもの

5

だ。もちろん、現在の職業上の立場もこのスピーチに共感を感じさせる原因にはなっているだろう。しかし、職業を異にする他の審査員で私と同年配の方々が王さんのスピーチを二位に推したのは、もしかすると自分の学生時代の思い出とダブらせて、「青春の挫折」という普遍的なテーマをこの話の中に見いだしていたからではないだろうか。

そのほかの感想としては、上位に入賞できなかったスピーチにも内容のあるものが多かったということである。なかでも、野生動物の保護をユーモラスに訴えたカナダのP・フィルコラさんのもの、日本の大学の閉鎖性を指摘したパキスタンのM・A・ナイムさんのものなどが、よくまとめられていていいと個人的には思った。「努力賞」「話題性賞」などの賞を作って、これらの出場者にも賞品をあげたいくらいである。

最後に提案だが、日本人も外国人もともに出場を認めるというスピーチ・コンテストを一度してみてもどうかだろうか。ただし、日本語は採点せずスピーチの内容や説得力で審査するというものである。大学に勤めるものとして

は、最近の日本人学生の文章力や発表能力には少々疑問があるので、もしかすると上位入賞は外国人ばかりということになるかもしれない。そうなれば、国語教育への反省にもつながると思うのだが、いかがであろうか。